

# 山大社会学同窓会報 第45号

2023 (令和5) 年5月10日発行

## 祭りも新型コロナウイルスに感染するのか？

社会学コース 教授 谷部 真吾

湯川洋司先生の後任として社会学コースに着任してから、丸7年が過ぎた。文字通り、あっという間である。この間、何人かの卒業生を送り出したが、このところ、どうしているかと思ひ出すことが多々ある。きっと、みなさんも、いろいろあったことであろう。なかには、新型コロナウイルスに感染した人もいたのではないだろうか。かくいう私も、2022年(令和4年)1月半ば過ぎに感染した。当時は4年生の卒論指導が終わった直後であったこともあり、幸いにも、学生はもちろん大学関係者を1人も濃厚接触者にせず、胸をなでおろした次第である。

ここ数年、人々の耳目をもっとも集めた現象といえば、間違いなく新型コロナウイルスの感染拡大であろう。私は日本の祭りの近現代における変化を研究しているが、全国の祭りも大きな影響を受け、中止や規模を縮小しての開催が相次いだ。最近になって、ようやくコロナ禍以前の行事構成で行われつつあるようである。例えば、2023年3月下旬に調査で訪れた静岡県掛川市横須賀地区でも、4月7日(金)～9日(日)に実施される祭りに向けて、準備が進められていた。この調査において、私は山車の上で奏される囃子の練習を見学した。囃子の練習には小・中学生が参加していた。実は、昨年も、同じような時期に同地を訪れ囃子の練習を見せてもらったのだが、その際、指導役を務めていた関係者がその出来の悪さに嘆息していたのを、よく覚えている。聞けば、コロナ禍のため、子どもたちを集めて十分な練習をすることができなかったのだという。それに対して今年は、しっかりと練習時間を確保することができたので、いい囃子を披露できそうだと話してくれた。

コロナ禍からの「完全復活」を予感させる祭りがある一方で、考えさせられる事例もある。大分県のある地域で行われる春祭りでは、県の無形民俗文化財に指定されている「神踊(かみおどり)」と「杖踊(つえおどり)」という2種類の民俗芸能が奉納される。この地域は、市の中心部まで車で30分ほどの距離にあるにもかかわらず、しばらく前から民俗芸能の後継者不足に悩まされていた。それでも何とか神踊と杖踊の奉納を続けてきたが、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、2020年の春祭り以降、奉納をやめてしまった。関係者によると、もう復活することはないのではないかとのことである。後継者不足のため民俗芸能の担い手も年配者が多く、ここまで頑張ってきたが、もう限界である。奉納をやめるいい口実ができた。そう語っていた。

各地の祭りの様子を知るにつれ、実は祭り自体も新型コロナウイルスに感染していたのではないかと思われてならない。これまで見られた中止や規模縮小は、ウイルスに感染したことによって現れた症状であり、祭りをコロナ禍以前の状態に戻すことができずにいるのは、後遺症に悩まされているからではないだろうか。その意味からすると、新型コロナウイルスは、ヒトだけでなく、文化や社会にも感染するのだといえよう。

## 私のスキルリスト

2005(平成17)年卒 堀 由宇也

最近、企業経営やDX(デジタルトランスフォーメーション)の話題の中で、“リスキリング”という言葉をよく耳にするようになりました。

“リスキリング”の定義については、詳しくは専門家の方々にお任せしますが、これからは、企業経営者、従業員、転職希望者等の誰もが“リスキリング”に直面する時代になっていくことは間違いなさそうです。

とはいえ、特に日本企業においては、まだまだ“リスキリング”の取り組みは盛んではありません。いくつかが要因はあるそうですが、その一つが“日本の経営は人材やポストをスキルで捉えることを怠ってきた”ことだと言われています。

“リスキリング”は“Re+skilling”なので、“Re”に取り組む前に、単なる人数や役職名で捉えてきた人材やポストを“〇〇スキルを持っている人材”とか“〇〇スキルを用いて業務を行うポスト”と捉え直すことから始める必要があります。この“スキルの可視化”に基づいてスキルギャップを埋め、同時にエンゲージメントも高めていく手段が“リスキリング”の一つの姿となります。

そのようなことを考えながら、私自身がこれまで、なんとか社会人としてやってこられている要因は何か?、どんなスキルをもって生きているのか?と自己分析をしてみると、強みだと思えるスキルとして“対人理解”や“チーム形成”などが浮かび上がってきました。

実は、このスキルを獲得したきっかけは、大学2年の時に社会情報論コースに拾ってもらった（第1・2希望に落ちていたので、文字通り拾ってもらった）ことでした。

特に大きなターニングポイントと言えるのが、3年の時、私の自由奔放さに対して「社会学の実践かもね。」と言っておおらかに付き合ってくださいと横田先生に見守られながら、地域活動を目的とした“地域活動お助けターミナル メディエーター”という学生サークルを立ち上げたことです。

この立ち上げメンバーは、山大・芸短・県大から集まった個性あふれる10人の学生です。10人ものエネルギーが同じベクトルに向いた時の推進力の大きさを実感するとともに、私個人の出力限界や視野の狭さもまた痛感させられました。当時、一々私のやりたいことに否定的な意見を言うメンバーがいて、堪りかねた私は「そんなに嫌なら抜けてもらって結構！」と言い放ってしまったのですが、「賛同できるからこそ、堀君が気づけていないリスクにも向き合う必要があると思って言っている！」と返され、人生最大の衝撃を受けたことは今も忘れられません。

楽しくも大変だったメディエーターでの経験の中で、今の私のスキルリストの核心になっている、チームメンバーに持てるスキルを最大限発揮してもらおうという“他力本願系スキル”を身につけ伸ばすことが出来たのだらうと思います。

これからは、スキルを経験の中から自然と身につけるだけではなく、欲しいスキルを狙って獲得するようになりたいと考えています。

## 「地域の誇り」をつくる仕事に就きました。

2007（平成19）年卒 春永（旧姓 濱津） 亜由美

劣等生だった私が寄稿など、担当教授だった高橋先生はハラハラしておられるのでは…（私自身がその次にハラハラしています）。

卒業後、私は山口市にある山口商工会議所で地域づくりを中心とする仕事に携わっています。商工会議所は本当に“なんでも屋”で、中小企業の支援から、歴史文化を背景にした観光商品開発、ちょうちんまつり、イベントの実施まで、“良いまち”“誇れるまち”を作る業務を、とにかくなんでもやっています。最近では「山口をチョコレートのにしよう！」と事業を組み立てています。

「なぜチョコレート？」と疑問に思われると思いますが、2018年の総務省家計調査で、全国平均支出額が7,000円程度のチョコレートへの支出が、山口市は29,000円という、他を圧倒的に引き離す結果を残し1位に躍り出たことに起因しています。

元々甘い物への支出が多い傾向にはあったようですが、この年は「異常だった」と言わざるを得ない結果でした。直近の調査では28位と低迷…今は1位に返り咲かせることを目指して必死に新しい取組を作っているところです。

そうこうしている間に、速水先生からご縁をいただき、人文学部の後輩のみなさんに向けた「キャリア教育」の授業に呼んでいただきました。学生時代から、これといった特徴も特技もなかった私ですが、今こうやって頑張っている理由はなんだろう？と、改めて考えた際に思い浮かんだのが、「オールマイティ(?)なチシキとチカラ」ということです（本来「全能」という意味の言葉ですが、ここでは「どこでもなんでも、幅広く」くらいで捉えていただくとありがたいです）。

「人文学部」で学んだことは「“人”って？」ということではないかと、私は勝手に考えています。言語や文化、社会や心理など、人がいることで存在する様々なことについて学ぶのが、人文学部。AIがどれほど発展しても、社会がどんな大きな変化を迎えようとも、人と人との関わりの中で生きていくのが、私たち「人間」です。だからこそ「人」や「社会」という、明確な答えがない（と言い切って良いのか不明ですが…）モノについて様々な切り口から学んだ私たちは、激動の世界でも、学生時代に学んだ「チシキとチカラ」を駆使して(?)、人間社会でオールマイティに生きていけると、私は思っているのです。

キャリア教育に呼んでいただいたのに、学生のみなさんの“ためになる話”は一切できませんでしたが、山口大学人文学部を卒業したことを将来にわたって誇りに思ってもらいたい！と考えて、お話をさせていただきました。と、なんともおこがましい話ではありますが、劣等生だった私は「あのとき学んだことが、こんなところでつながるなんて！」ということもあったりして、人文学部卒に誇りを持って、毎日ワクワクしながら（苦悶の表情の場合もありますもちろん…）「地域の誇り」を作る業務に勤めています。

みなさんが山口大学に寄ってくださる機会に「ああ良かった、山口はまだ元気だ」と思っていただけのように、これからも人と社会に揉まれながら、地域を盛りあげる、地域に誇りを持てる、新しい取組を作っていきたいと思っています！

## 山口大学での学びを振り返って

2023（令和5）年卒 宮本 大輔

この度私たちは晴れて卒業の日を迎えることができました。しかし、私たちはこの卒業が自分の力だけによるものではないことを忘れてはいけません。ここまで育ててくれた親、苦楽を共にした友人たち、最

後まで指導してくださった先生方の力なくては今この場に私たちはいません。

まず私が民俗学・文化人類学を専攻しようと思った経緯についてお話しします。私は中学の時に中国の大連というところにおり、海外での生活をしていました。その暮らしの中で、日本人という自分から見て、同じ人間なのに住んでいる国・地域が違うだけで文化の違いがあるということに気がつきました。中国では地下の市場で髪引の引っぱり合いをしながら喧嘩をしているのを見るのはしょっちゅうでしたし、買い物していた時はレジのおばさんが釣銭を投げ渡してくることもありました。この行動に何の理由があるのか、どこに理由があるのかということに私は深く興味を持っていました。

時は流れて私は山口大学に入学しましたが、大学で社会学という授業に出会いました。その授業では中国の客家の研究をしている先生のオムニバスがあり、私はその授業にひかれ、文化人類学を専攻しました。先生のゼミで一貫してテーマだったと思うのは、人々の差異を楽しむということでした。先生自身が国や地域の差異だけではなく私たち学生の差異にまで興味を持っている姿を見て、私自身にも本当の意味で人間の多様性というものが見えてきたのではないかと思います。

私の研究はメディアを通して人間の多様性の現在を見ていくというテーマでした。メディアと文化人類学という結びつきに苦労しましたが、先生はとても親身になってアイディアを示し手助けしてくださり、参考になりそうな本なども貸し出してくださいました。「私ができるのは君たちが卒論を書く手助けであって、本文を書くのは君たち」という先生の言葉が印象に残っています。卒論作成の最後のほうは、訂正されては修正する作業が連続する日々でしたが、できの悪い私にも親身になってくださる先生がいたこと、一緒に卒論を書き上げた仲間がいたこと、そして卒論を書き上げられたことはわたしの人生の財産になると思います。

最後になりますが、卒業を区切りとして、これから続く人生の中で、大学生活のことを思い出し、人への感謝を忘れず、生きていこうと思います。私にかかわってくださった皆さんすべてに感謝の念を申し上げます。ありがとうございました。

## ☆社会学同窓会・社会学研究室からのお知らせとお願い

新型コロナウイルス感染症への対応も3年を超え、ポスト・コロナへの道筋がようやくみえてきました。とはいえ、残念ながら今年度も、社会学同窓会の総会・懇親会は中止という判断に至りました。3月には、社会学コースで学んだ39名と大学院人文科学研究科現代社会研究コースの修了生2名が巣立っていきました。卒業式当日の社会学コース・社会学同窓会主催卒業祝賀会も、前回、前々回と同様に、短縮版で開催いたしました。改めて、卒業生・修了生の皆様のご健勝を祈念いたします。